法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

華南海域における都市の形成過程に関する基礎的研究

恩田, 重直 / ONDA, Shigenao

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費補助金研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
5
(発行年 / Year)
2011-05

Hosei University Repository

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　5 月 28 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009～2010
課題番号：２１７６０５０６
研究課題名（和文）
華南海域における都市の形成過程に関する基礎的研究
研究課題名（英文）
Fundamental Research on Urban Transformation of Port Cities along the South China Sea
研究代表者
恩田　重直（ONDA SHIGENAO）
法政大学・政策創造研究科・講師
研究者番号：８０５１１２９５

研究成果の概要（和文）：
本研究は、大航海時代から 20 世紀中葉にかけての華南海域における港湾都市の成立・変容・再編の過程を明らかにすることを目的に、文献史料調査と現地調査にもとづいて考察を進めた。具体的には、広東省西部の歴史的な港湾都市である雷州を対象として、22 例の住居や宗教施設について詳細な実測及び聞き取り調査を実施し、歴史的な住宅地の空間構成とともに、1930 年前後に街路の拡幅により街路沿いに建設された建物の整備過程を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
This research aims to examine the formation, transformation, and reformation of port cities along the South China Sea from the Age of Discovery to the middle of 20th century, largely relying on the collection of historical data and extensive fieldworks. Leizhou, a historical port city in the west of Guangdong Province, was selected for detailed study. The measuring survey and interview were conducted for about 22 building complexes (including dwellings and temples). The analysis of these buildings demonstrated the spatial composition of the historical residential quarters and clarified the process of widening streets and building Qilou along them in the 1930s.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,600,000	480,000	2,080,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築学　建築史・意匠
キーワード：都市空間史、海域ネットワーク、港湾都市、華南、雷州

１．研究開始当初の背景

本研究の全体像は、華南海域における明清代から近代へ至る都市形成史を明らかにすることにあるが（図 1）、対象とする時代的にも、地域的にも、これまでの中国都市研究においては分野を問わず、立ち遅れた領域である。それは、李済（須山卓訳『支那民族の形成』生活社 1943）やスキナーら（G. Willian Skinner ed., The City in Late Imperial China, Stanford University Press, 1977）が地方志などをもとに中国全土の都市数の変化を定量的に分析した結果から明らかなよ

Hosei University Repository

うに、華南の都市建設が悠久の歴史をもつ中国においてきわめて新しい時代である明代以降に活発化することにつきよう。日本においては、戦前戦後を通じて、日本古代の都城との関係に主眼を置いた唐代や、市制や坊制の崩壊などにより都市景観が画期的に変化したとされる宋代が専らの対象とされたため、扱われた都市も長安や洛陽、開封などの都城に限定されてきたのである。無論、宋代に形づくられた海のシルクロードに位置する泉州や広州は研究対象になりえたが、貿易にかかわる事象が対象とされることが多く、都市全体を明らかにするものは少ない上、その後の変遷が言及されることはほとんどなかった。その結果、斯波義信が『中国都市史』（東京大学出版会 2002）で指摘するように、長らく明清代の都市研究が欠如する事態が生じたのである。

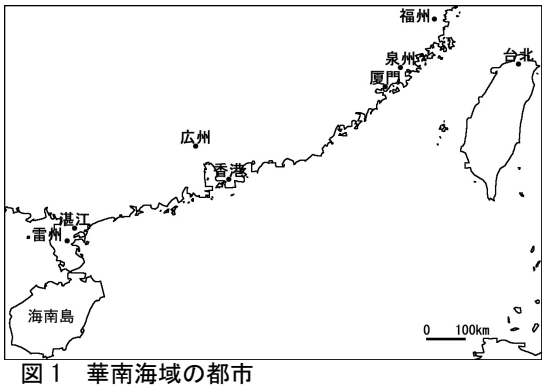

図１　華南海域の都市

代表者は、これまで福建省の厦門大学への 2 年間の留学を踏まえ、博士論文で厦門の都市形成史に関する研究をまとめた。そこでは、明代初頭の海禁政策により設置された軍事拠点を端緒とする厦門が、その後の大航海時代以降、港町化していき、ついには中国の港湾都市として位置づけられていく過程を福建省の歴史的な港湾都市である泉州や漳州との関係も含めて論じ、港湾空間の整備や租界の設置、都市改造の実施に際して、常に先行条件として存在する既成市街の制約を受けながら都市空間の更新、再編がなされると同時に、市域が拡大されてきたことを指摘した。本研究では、さらに華南海域に視野を広げ、沿海都市の形成過程を明らかにすることで、華南海域の沿海都市を中国全体の中で総体的に位置づけていくことを念頭に置いている。

２．研究の目的

本研究は、15 世紀頃からはじまる大航海時代から 20 世紀中葉にかけての華南海域、すなわち福建省および広東省の沿岸部を対象として、海域を通じた交流を視野に入れながら、個々の沿海都市の成立、変容、再編の過程を建築史・都市史の観点から明らかにするとともに、空間形成に見られる都市相互の影響を総体的に解明しようとする全体構想の一環にある。本研究では、広東省の西部に位置する雷州半島の歴史的な港湾都市、雷州を対象として、現存する住居や都市施設、街路空間といった物理的な空間の実測および聞き取り調査を実施しながら、あわせて文献史料を活用することで、前近代から近代へ至る都市の形成過程を空間的側面から明らかにした上で、都市空間と人々の営みとのかかわりを歴史的に解き明かすことを目的としている。

３．研究の方法

本研究は、現地に現存する住居や都市施設、港湾施設等の建築単体の遺構、ならびにその建築に隣接する街路や敷地等の周辺環境を含めた都市空間の実測及び聞き取り調査を実施しながら考察を進めていくものである。こうした現地で得られた実測図面等のオリジナルなデータを基礎に、あわせて古文献や古文書、公文書、地図をはじめとする文献史料を総合的に活用し、広東省西部に位置する雷州と湛江の形成過程を空間的側面に焦点を当てながら総体的に明らかにしていく。なお、現存する遺構には、本研究が対象とする大航海時代初期の建築物は皆無に等しいが、『雷州府志』（明万暦年間、清嘉慶年間）等の文献に限らず、現地調査の際には碑文や土地契約文書、族譜等の史料の発掘にも努め、遺構が存在しない時代の形成過程も可能な限り言及する。

４．研究成果

本研究は、日本国内および中国での文献史料調査とあわせて、現地調査での成果にもとづき考察を進めた。現地調査は、2009 年 9 月 1 日～8 日と 2010 年 7 月 18 日～28 日に実施し、主に旧雷州城内における歴史的な建造物の実測及び聞き取り調査を行った。なお、詳細な実測調査を行った建築物は、7 例の四合院住宅と 3 例の宗教施設、12 例の騎楼を有する建築物（うち 4 例は宗教施設）である。

（1）雷州城の成り立ち

「雷州」という呼称が登場するのは唐代の 634 年のことであるが、当時の雷州城について、城壁の規模や形状等は定かではない。城壁の建設に関して、明代の万暦『雷州府志』等の地方志から具体的に明らかになるのは 、宋代以降のことである。それによれば、宋代の淳化 5（994）年に子城が建設され、紹興 15（1145）年には外城が建設されたという。その後、明代には雷州府となり、それまでの城壁を基礎に、城壁の高さを高くしたり、濠を巡らしたり、一段と整備がなされた。このように整備された雷州城は、雷州府衙をはじめとする役所等が点在する内城とその南側

Hosei University Repository

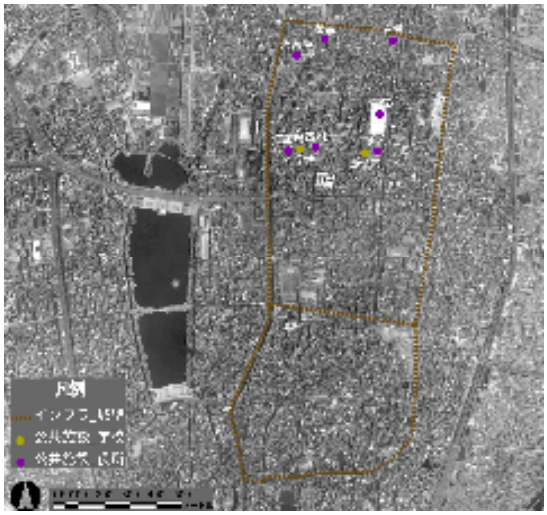

図 2　雷州城（清代）

に接する外城からなる（図 2）。

雷州の城内は、明代の成化 20（1484）年に「坊」という単位に分けられた。当初、坊は内城に 13、外城に 8 の合計 21 あったが、清代の嘉慶 16（1811）年には、内城が 17、外城が 12 に増加している。実測調査を行った四合院住宅は、いずれも登雲坊にある。登雲坊は、坊の設置当初から存在し、外城に位置している。坊内には「観察第」と呼ばれる清代の科挙及第者の邸宅がある等 、雷州における住宅地の一典型といえる。なお、聞き取り調査によれば、1930 年頃には、この一帯は雷州の中でも指折りの高級住宅地であったという 。

（2）住宅地の空間構成

①坊の空間構成

登雲坊の明確な範囲は定かになっていないが、東西の一本の街路が中心となっている（図 3）。西側では、かつて内城と外城の門を結んでいた南亭街と接続する。南亭街は、建物の 2 階部分が迫り出し、半戸外の歩道をかたちづくる「騎楼」が連続する商業街となっている。この南亭街に設けられた大門をくぐり、進んでいくと、「登雲坊」と書かれた扁額が掲げられた土地神廟がある。ここには、土地公と土地婆が祀られている。また、東西の街路の中ほどで南北に交わる街路の交差点と街路の南端にも同様に、登雲坊の土地神廟があり、交差点には土地堂がある。一方、南北の街路の北端には白馬廟が置かれている。さらに、東西の街路の東端には、霊山公館があり、中に入ると、「調会坊」と書かれており、土地公が祀られている。このように坊の境界には、宗教施設が置かれており、祀られる神仙はとりわけ土地神が多い。

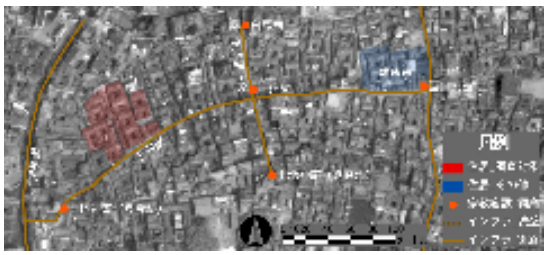

図 3　登雲坊

②坊を構成する住宅

中国では「三合院」や「四合院」と呼ばれる、3 つないしは 4 つの棟で中庭を取り囲む住宅が普遍的に存在している。雷州においても同様であり、比較的小さな中庭を 3 つの棟で冂の字型に囲む三合院が単位となり、奥に連なって 1 つの住宅をかたちづくる。以下では、事例をもとに雷州の住宅を見ていくことにする。

登雲坊では、北から南に緩やかに傾斜する地形となっており、多くは冂の字型の単位が南から北に連なる。各住宅は坊の主要な街路である東西の街路からアプローチすることになるが、1 つないしは 2 つの中庭で 1 つの住宅をかたちづくることが多く、東西の街路から南北方向の路地を引き込むことで、全体が形成されている。

下河里 W 氏住宅は、血縁関係のある一族で居住している事例である（図 4）。W 氏の祖先は、順徳の龍山郷から移り住み、中には澳門や香港との貿易業で財を成した人物も排出している。聞き取り対象者は下河里に移住した初代から数えて 7 代目にあたる。

さて、住宅の構成は、登雲坊の東西街路に面して設けられた大門を入ると南北に貫かれた通路があり、通路の西側には 4 つの中庭からなる住戸が並んでいる。通路に面して、各住戸の大門があるが、いずれも東南に設けられている。この大門を入ると、中庭が広がる。北側に置かれた間口 3 間の棟が主屋となる「正房」である。この正房の南側、左右の

図 4　下河里W氏住宅

Hosei University Repository

棟が「廂房」であり、大門があるため、東側では間口が1間､西側では2間となっている。こうした冂の字型の単位の西側には1列に配された付属屋が設けられ、厨房等として利用される。これらの建物により全体が構成されているが、構造は中国の一般的な四合院住宅で採用されている木の柱の外側にレンガ壁を設ける「木骨磚造」とは異なり、いずれの建物においても雷州では木柱は設けず、磚壁だけで梁を受けるのが特徴である。

（3）騎楼の建設過程

①街路の拡幅と騎楼の建設

雷州において騎楼が存在するのは、旧城内では鎮中西路・東路、広朝南街、曲街、南亭街などである。いずれも幅員は 10 メートルほどであり、城内の幹線道路をかたちづくっている。こうした騎楼の建設は、民国期の街路の拡幅に伴い整備された 。実測調査を実施した騎楼を有する建築物は、全て曲街に位置するが、いずれも民国 20（1931）年頃に建設されたようである 。

建設年代を裏付けることができる事例として、曲街の中段に位置する康皇廟がある（写真 1)。康皇廟の棟木には、「中華民国 4 年……重建」と書かれており、1915 年に改築がなされたことを物語っている。一方、大門の両側の壁面に彫り込まれた対聯には、「共和辛未年……書」と刻まれており、1931 年に壁が完成したことが読み取れる。このように棟と壁体の建設年代が一致していないのは、1930 年頃に街路が拡幅され、同時に壁面を後退させることで騎楼を設置したことによるものと考えられる。

騎楼の建設に関しては、曲街に移り住んで 3 代目になるというＴ氏からの聞き取り調査により、当時の様子をうかがい知ることができる 。それによれば、街路の拡幅ならびに騎楼の建設にあたって、当時の政府からの補償は騎楼に欠くことのできない 2 本の柱のみで、土地の提供はもちろんのこと、敷地が後退することにより生じる建物の改築や修理にかかる費用や騎楼部分の舗装なども全て住民が負担したという。このような背景があったにもかかわらず、曲街の大部分において、騎楼が設置されたことは、相当な強制力をもって実施されたといえよう。反面、騎楼の形態には様々なものが見られ、それは従前の建物と大きく関係している。

写真 1　棟木（左）と対聯（右）に刻まれた年

②様々な騎楼

もともと商業街である曲街には、間口が狭く、奥行の長い建物が壁を接して並んでいる。間口の幅は 4.5 メートル程度であり、平入りの複数の棟が奥行方向に中庭を挟みながら展開する。それぞれの棟は、雷州の三合院住宅と同様に、土壁もしくは磚壁で梁を受ける構造であり、中国で一般的に見られる「木骨磚造」とは異なっている。

街路の拡幅に伴い、街路に面しては騎楼が設けられたが、その際に敷地全体が建て替えられることは少なく、多くは街路に面した棟だけが変化した。また、隣接する住戸とは、壁を共有しておらず、各住戸で騎楼の設置に対応したことがうかがえる。

・切断型（図 5）

曲街には、日本の町屋における厨子二階のような、2 階部分の階高が極端に低いものが散見される。雷州の住居では、棟木は奥行に対してほぼ中央に配されるのに対して、これらは棟木の位置が街路側に偏っていることから、街路の拡幅に該当する部分を壊し、壁面を後退させたと考えられる。これは、最も簡便な方法であることから、多くの建物で採用されたことは想像に難くない。なお、2 階部分は階高が足りないため、物置になっている事例が多い。

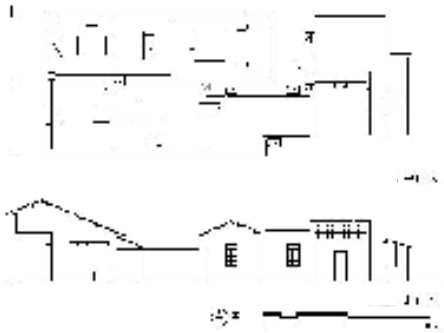

図 5　切断型の騎楼

・改築型

一方、街路の拡幅に伴い、街路に面した棟を改築したものも少なからず、見られる。棟木の位置が切断型とは異なり、奥行に対してほぼ中央に配されており、2 階部分は十分に階高が確保され、居室として使われる。2 階部分の外観には、3 連アーチなどが施されて

Hosei University Repository

おり、「洋楼」と呼ばれた。しかし、洋風にデザインされたのはファサードのみである上、後方には従前からの平屋の棟があり、改築されたのは街路に面した棟だけである。

（4）研究成果のまとめと今後の展望

以上、文献史料調査と実測及び聞き取り調査の成果にもとづき、雷州の都市形成を住宅地の空間構成と騎楼の建設過程の側面から明らかにした。雷州の外城に位置し、住宅地の一典型を示していると考えられる登雲坊は、坊を貫く東西の街路から南北の路地を引き込みながら、冂の字型を単位とする住宅が南北に連なって住宅地が形成されていることがわかった。また、雷州では 1930 年前後に幹線道路の拡幅が行われ、街路沿いには騎楼が整備された。中でも実測調査を行った曲街では、街路の拡幅に際して、土地建物の所有者から土地が提供されるとともに、街路に沿って騎楼が設置されたことにより、街並みは大きく変化したが、従前の敷地割が再編されるようなことは起きず、街路に面した従前の建物を切断したり、改築したりすることで騎楼が建設されたことが明らかになった。

本研究で取り上げた騎楼は、雷州に限らず、広東省や福建省、さらには香港やバンコク、シンガポールなど、中国南部から東南アジアの都市に広く存在しており、これらの都市に共通的な街並みをつくりだしている。そのため、これまで騎楼に関する研究は国内外を問わず、数多く見られるが、多くはその形態や法制度に着目したものであり、本研究のように既存の都市の再編過程として、騎楼の建設に言及したものはきわめて少ない。本研究ならびに代表者のこれまでの研究を通じて、騎楼建設の地域性や空間的特質が明らかにされつつあることは、騎楼研究、ひいては近代中国の都市史研究の新たな側面が描き出されることに疑いはない。また、これまで都市史の分野ではほとんど言及されてこなかった明清代以来の華南海域における港湾都市の形成過程を明らかにする本研究は、歴史的な中国都市ばかりでなく、現代の中国都市を論ずる上でも、非常に有意義なものとなることを確信する。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①恩田重直「広東省・雷州における住宅地の空間構成について」『民俗建築』（査読無）第 138 号、57-62 頁、日本民俗建築学会、2010

②恩田重直「地図から読む厦門の形成過程」『地理月報』（査読無）第 519 号、1-3 頁、二宮書店、2010

③恩田重直「軍事と交易：港湾都市・厦門の明清代」『都市建築史的観点からみた中央と地方に関する研究』（査読無）33-37 頁、日本建築学会、2010

④恩田重直「ティポロジアから都市史研究へ」『建築雑誌』（査読無）第 1593 号、18-19 頁、日本建築学会、2009

〔学会発表〕（計 6 件）

①恩田重直「広東省・雷州における騎楼の建設過程」2011 年度日本民俗建築学会大会、2011（平成 23）年 5 月 21 日、愛知淑徳大学（愛知県）

②恩田重直「地产与建筑：厦门近代市政改造初探(1927-1932)」、中国建築史学国際研討会（The 5th International Conference on Chinese Architectural History）、2010（平成 22）年 12 月 10 日、華南理工大学建築学院（中国・広州）

③恩田重直「都市再生とグローバリゼーション：中国都市史からのアプローチ」法政大学サステイナビリティ研究教育機構（総合研究会 1）、2010（平成 22）年 9 月 30 日、法政大学サステイナビリティ研究教育機構会議室（東京都）

④恩田重直「泉田英雄報告「植民／伝統―イギリス植民地と近代日本の建設技術者」に対するコメント」2010 年度日本建築学会大会パネルディスカッション、2010（平成 22）年 9 月 10 日、富山大学（富山県）

⑤恩田重直「広東省・雷州における住宅地の空間構成について」2010 年度日本民俗建築学会大会、2010（平成 22）年 5 月 22 日、北海道大学（北海道）

⑥恩田重直「厦門的近代城市建設与海外華僑華人」7th Conference of the International Society for the Study of Chinese Overseas(ISSCO,世界海外华人研究学会第七届国际会议)、2010（平成 22）年 5 月 8 日、Nanyang Technological University（シンガポール）

６．研究組織

(1)研究代表者

恩田　重直（ONDA SHIGENAO）

法政大学・政策創造研究科・講師

研究者番号：８０５１１２９５

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：